

『天草版平家物語』考 (6)

市井外喜子 (大東文化大学名誉教授)

A Study of “Amakusaban-Heike-Monogatari” (6)

Tokiko ICHII

はじめに

『大東文化大学紀要』人文科学に、これまで5回にわたり古典平家物語と天草版平家物語の構成比較を報告してきた。今回は、『天草版平家物語』考 (6) を報告する。

『天草版平家物語』は、1592年イエズス会天草学林から出版された。原本名を『日本の言葉と Historia を習ひ知らんと欲する人のために世話にやはらげたる平家の物語』とするものである。

天草版平家物語編纂方針

『天草版平家物語』の序 読誦の人に対して書す に、編者不干ハビヤンは次のような一節を記している。注目すべき点を簡条書きにして示すと同時に、具体例の一端を記す。

- ① (師は) 天の御法を説かんとするにわ、この国の風俗を知り、ことばを達すべきこと専らなり、そのために書を選んで、これを編め：叡山の住侶、玄恵法印の製作平家物語に如くわあらじ と、選定する。
- ② (書写に臨んで、師は) いまこの平家をば書物の如くにせず、兩人相對して雑談をなすが如く、ことばのてにはを書写せよ。：聞き手兼進行役をつとめる右馬の允 (VM.) と、話し手の喜一検校 (QI.) が、当時の話し言葉によって語るものとする。(対話形式) その様子的一端を記す。
 3₉VM. 検校の坊、平家の由来が聞きたいほどに、あらあら略してを語りあれ。
 QI. やすいことをござる：をうかた語りまらしょうず、まず平家物語の書きはじめにわをごりをきわめ、人をも人と思わぬやうなるものわやがて亡びたとゆう証跡に、
 6₂₀VM. さてさてそれわいたづらなことを公家たちわせられたの？
 QI. そのことをござる。あの公家たちがこのやうなことをせらるることわ、いまに始めぬことをござる：
- ③ (また) この国の風俗として、一人にあまたの名、官位の称えあることを避くべし。：高野本卷第一禿髪にみられる「清盛」を例として示す。清盛公・六波羅殿・入道相国・禪門等を、天草版平家では Qiyomori 一つに統一されている。また天草版では、VM. あるいは QI. が用いる Qiyomori、主語をおぎなう Qiyomori のように、理解を助ける配慮がゆきとどいている。
- ④ (不干ハビヤンは) 「貴きをん主 Iesu Christo の Euangelho の御法を広めんためなれば、師の命に従って、この物語を力の及ぶところわ本書のことばを違えず書写し、抜書となしたるものなり」と、表

明している。：傍線部の具体例を示す。

天草版平家 P11 1~6

㊦: さて Qiyomori 五十一の頃病にかされ、存命も不定に見えたによって、その祈りのためにか出家入道して法名をば浄海と名のられてごぞった。天道 (Tentō) からその所作を御納受なさるるしるしにか、病もたちどころに平癒して、

高野本秃髮冒頭 P12 14~16

㊧: 角て清盛公、仁安三年十一月十一日、年五十一にて、病にかされ、存命の為に忽に出家入道す。法名は浄海とこそ名のられけれ。其しるしにや、宿病たちどころにいへて、

対話形式・文語体から口語体へと移行のために、理解を得るためのことばの増減は見られるが、文章の一致をみることができよう。

古典平家には無く、天草版平家で注目される「天道 (Tentō)」について簡潔に記しておきたい。

古典平家では、高野本: 其しるしにや、と認められるところが、天草版平家では「天道 (Tentō) からその所作を御納受なさるるしるしにか」と見られる。この tentō は、天草版平家には他に5カ所みられる。

- 1 いまこれらの莫大の御恩を忘れて、みだりがわしゅう法皇を傾けさせられうずることわ tentō の御内証にもそむきまいらせられうず (巻第一第六: 巻二教訓状)
- 2 人の思いを休めさせられれば思し召すこともかない、人の願いをかなえさせられれば、tentō これを御納受あって、御願もすなわち成就いたいて、中宮やがて皇子御誕生なされて (巻第一第十: 巻三教文)
- 3 これわ全く頼朝が高名でわない: ひとえに tentō の御計らいぢやと言うて、喜ばれた。(巻第二第十: 巻五五節之沙汰)
- 4 VM. さて平家わいかう符が悪かったの?
QI. まことに tentō から離されたと、見えてござる。(巻第三第六: 巻第七主上都落 QI. の独自の言葉。直接比較することはできない)
- 5 豊後の国に代官の心になっていられた頼経とゆう人のところえ、京からを使いがたって平家わ tentō にも離され君にも捨てられまらして、(巻第三第十: 巻第八緒環)

以上が天草版平家に現われる tentō のすべてである。

対応する古典平家には1例の「天道」もみられない。古典平家では、天照大神・正八幡宮・八幡大菩薩および神明である。またこれらの天照大神・正八幡宮・八幡大菩薩・神明は、天草版平家には、その例が見られない。『日葡辞書』には、Tentō: Tenno michi 天の道、すなわち、天の秩序と摂理と、すでに我々はデウス (Deos 神) をこの名で呼ぶのが普通であるけれども、ゼンチョ (gētios 異教徒) は上記の第一の意味「天の道」以上に考え及ぼしていたとは思われない、とある。「天照大神・正八幡宮・八幡大菩薩・神明」を、デウスを意味する「tentō」に改めた不干ハビヤンの、日本在来の仏教や神道に対峙した視点をうかがうことができる。ハビヤンが tentō の意味を厳しく峻別すると同時に、平家物語の内容をも吟味して天草版平家を成した結果によるものと考えられる。

以上、古典平家から天草版平家を編む際の不干ハビヤンの工夫を見たが、外来宣教師の日本語テキストとしての配慮 (理解を容易にしようとする) が特筆できる。それと同時に、tentō を通してみると、古典平家から天草版平家を抄訳した日本人のイルマン、不干ハビヤンが細心の注意を払い、神道・仏

教的な要素を巧みに排除していることをも注目できる。

1 天草版平家物語巻第一の構成

前述のような書写基準・目的にしたがって抄訳された天草版平家と古典平家（高野本）との構成比較を行なうために、対校表を作成し、そこから得られる諸点について検討を加える。

(1) 天草版平家物語巻第一の表題および古典平家との対校表

対校表を示す前に、天草版平家物語巻第一（12章段）の表題を記すことにする。

- 第一. 平家の先祖の系図，また忠盛の上のほまれと，清盛の威勢栄華のこと。
- 第二. 重盛の次男関白殿え狼藉をなされたこと：これ平家に対しての謀叛の根源となったこと。
- 第三. 成親卿位あらそいゆえに，平家に対して謀叛を企てられたことが顕れ，その身をはじめ，くみしたほどのもの搦め取られ，そのうちに西光とゆうものわ首をうたれたこと。
- 第四. 重盛父の清盛に成親卿を害せられぬやうに，教訓をせられたこと。
- 第五. 成親卿の子息少将についてのこと。
- 第六. 重盛父清盛の法皇え対し奉っての憤りの深いことを諫められ，その謀として，勢をあつめられたこと。
- 第七. 成親卿と，その子少将流罪に行われたこと。
- 第八. 成親卿の最後のこと：その北の方都にて尼になりかの後世をとむらわれたこと，並びに少将かさねて鬼界が島え流され，そこで康頼や，俊寛やなどと憂き目をしのがれたこと。
- 第九. 康頼と，少将とかの島で熊野詣のまねをし，また卒塔婆をつくって流されたことを蘇武が雁書にひきあわせて語ること。
- 第十. 鬼界が島の流人を許さるるについて，あとに残らるる俊寛の悲しみの深いこと。
- 第十一. 少将，康頼みやこえ帰らるる道すがらのこと。
- 第十二. 有王鬼界が島に渡って，俊寛に会い：俊寛死去せらるれば茶毘をして，その遺骨をくびにかけ，都え帰り上り，方々修行して，その後世をとむらうたこと。

さて以下に示すのが天草版平家巻第一と、それに対応する古典平家巻第一から巻第三までの対校表である。天草版平家巻第一に含まれる全12章段が、古典平家の各章段と対比できるように示してある。両平家の構成特徴が把握しやすいように、登載章段名の有無を明らかにした作表である。天草版平家の内容と僅かに拘わりを持つ古典平家の章段名をも登載章段としてとりあげた。登載章段名の有無を軸としたのは、天草版平家の構成要素（受容と排除）を明らかにするためである。

天草版平家 巻第一	古典平家（高野本）		備 考
	登載章段名	不登載章段名	
第一	祇園精舎 殿上閣討 鱸 禿髪		巻第一

第二 第三	吾身栄花 殿下乗合 鹿谷 俊寛沙汰	祇王 二代后 額打論 清水寺炎上 東宮立 鶉川軍 願立 御輿振 内裏炎上	天草版平家卷第 二第一章段へ移 行
第四 第五 第六 第七 第八	西光被斬 小教訓(前半まで) 小教訓 少将乞請 教訓状 烽火之沙汰 大納言流罪 阿古屋之松 大納言死去	座主流 一行阿闍梨之沙汰 徳大寺巖島詣 山門滅亡 堂衆合戦 山門滅亡 善光寺炎上	卷第二
第九	康頼祝言(前半数行) 康頼祝言 卒都婆流 蘇武	公卿揃 大塔建立 頼豪 廳 医師問答 無文 灯炉之沙汰 金渡 法印問答 大臣流罪 行隆之沙汰 法皇被流 城南之離宮	卷第三
第十	赦文 足摺 御産		
第十一			
第十二	少将都帰 有王 僧都死去		

(2) 対校表の観察

(2) - 1 天草版平家巻第一第一章段冒頭—古典平家巻第一「祇園精舎」冒頭の対比

まず天草版平家巻第一の冒頭、第一章段の様子をみることにする。第一章段は最も注目される章段である。

第一 平家の先祖の系図、また忠盛の上のほまれと、清盛の威勢栄華のこと、には、古典平家から「祇園精舎・殿上闇討・鱸・禿髪・吾身栄花」の5章段分がとりこまれている。

VM. 検校の坊、平家の由来が聞きたいほどに、あらあら略してを語りあれ。

QI. やすいことでござる：をうかた語りまらしょうず。と VM. からの請いをうけて QI. が語りはじめ「祇園精舎」は、次のものである。

まず平家物語の書きはじめにわをごりをきわめ、人をも人と思わぬやうなるものわやがて亡びたとゆう証跡に、大唐、日本にをいてをごりをきわめたひとびとの果てた様体をかつ申してから、さて六波羅の入道先の太政大臣清盛公と申した人の行儀の不法なことをのせたものでござる。さてその清盛の先祖わ（清盛の先祖について簡潔な略史が続く）

古典平家「祇園精舎」冒頭

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。婆羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。平家物語全般の序にも相当する部分が、天草版平家では排除されている。語り本系（屋代本・竹柏園本・鎌倉本・他）あるいは読み本系（源平闘諍録・四部合戦状本・延慶本・他）の『平家物語』には冒頭に「祇園精舎」章段を持ち、諸行無常・盛者必衰の仏教思想が主題とされている。

この冒頭の「諸行無常」・「盛者必衰」を欠く天草版平家は、異教である仏教的な視点ではなく、「をごりをきわめ、人をも人と思わぬやうなるもの」としての清盛の、「行儀の不法なことをのせたもの」として『天草版平家物語』を語ろうとしていると言える。

古典平家から天草版平家へと姿を変えるには、文語から口語への文体の変化があり、内容的には全訳ではなく「あらあら略して」とあるように、抄訳をもって語られている。それも編者である不干ハビヤンが原文を要約したり、省略したり、あるいは独自に語句を加えたりしている。それらに注意を払いながら、天草版平家の特徴を捕えなければならない。

(2) - 2 「鹿谷」事件

平家物語巻第一の大事件は「鹿谷」事件である。平家悪行を第三章段～第十二章段まで巻第一の大半をしめる10章段で、鹿谷事件を語っている。藤原成親等による打倒平家の策が失敗し、その顛末後日譚がその内容であり、古典平家では巻第一「鹿谷」から巻第三「僧都死去」に及ぶ。

「鹿谷」事件の語りはじめを記しておく。

第三 成親卿位あらそいゆえに、平家に対し謀叛を企てられたことが顕れ、その身をはじめ、くみしたほどのもの搦め取られ、そのうちに西光とゆうものわ首をうたれたこと。

VM. さて平家の悪行わかからぬことぢゃの？

QI. そのことでござる：平家の悪行わこればかりでもござない。そのうえ無理な位あらそいをして、あまたの人々をこえて次男宗盛右大将とゆう官にあがられた。

というように右馬の允の問いかけに対する喜一検校の語る平家の悪行は、巻第一最終章段まで続いていくことになる。第十二 有王鬼界が島に渡って、俊寛に会い：俊寛死去せらるれば茶毘をして、その遣

骨をくびにかけ、都え帰り上り、方々修行して、その後世をとむらうたこと。とする章段の最後は、このやうに人の思い嘆きのつもる平家の末わなんとあらうか？恐ろしいことぢや、と結ばれている。これが巻第一の最終末尾である。

『平家物語』から『天草版平家物語』を抄訳した日本人のイルマン、不干ハビヤンの編纂姿勢が明白に窺われる。平家の全盛から衰亡にいたる原因を、古典平家の各章段から万遍なく取り出すのではなく、「鹿谷」事件に焦点をあわせ、他の内容は排除するということが特記できる。

平家全盛時代に起った「鹿谷」事件を詳述し、同時に起った山門の騒動等は、天草版平家から排除されているのが注目される。

したがって古典平家にみられるような混乱・不統一が生ずることなく、「鹿谷」事件の連続性が保たれている。鮮明な「鹿谷」事件が語られ、主要人物の大納言成親・法勝寺執行俊寛の像がくっきりと描かれることになる。取捨選択の厳しさが、統一性を結果的にもたらしたと言えよう。またこのことは、外国人宣教師の日本語のテキスト『天草版平家物語』として、内容に一貫性が得られ、理解を容易にするという利点も、兼ね備えることになっている。

2 天草版平家物語巻第二の構成

巻第一の構成を記す際にも示したように、巻第二の構成をみるためにも古典平家（高野本）との対校表を作成し、そこから得られる諸点について検討を加えることにする。

(1) 天草版平家物語巻第二の表題および古典平家との対校表

対校表を示す前に、天草版平家物語巻第二（10章段）の表題を記すことにする。

- 第一. 祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち、親子三人尼になり、世を厭うたことと、またその仏も尼になったこと。
- 第二. 高倉の宮の御謀叛あらわれて、三井寺え落ちさせられたこと、また長兵衛とゆう宮の侍あとに残って合戦をし、生け捕られたこと。
- 第三. 三位入道の嫡子仲綱馬ゆえに面目を失われたことによって、この恥をすすがうずるとて、謀叛ををこされたこと：ならびに競が宗盛をたばかって主の恥をすすいだこと。
- 第四. 三井寺にわ長僉議をして、夜を明いて夜討ちをしそこなうて、道からもどったこと。
- 第五. 三井寺を落ちさせられて宇治橋にをいて矢切りの但馬や、浄妙坊が合戦のこと。
- 第六. 足利の又太郎宇治川を渡いたことと、また源三位入道、そのほかこの一族討死のこと。
- 第七. 飛驒の守とゆう平家の兵宮を追いかけて討ち奉ったことと、そののち宮のを子をも平家失い奉らうとせられたこと。
- 第八. 新三位入道の由来と、同じくその鵠を射られた高名のこと。
- 第九. 文覚のすすめによって頼朝の謀叛ををこさせられたことと、平家わまたこれを平げうとて、討手をくだされたこと。
- 第十. 平家のつわものども鳥の羽音に驚いて、敗軍して面目を失い、京えのほれば、頼朝わ軍に勝って鎌倉え帰られたこと。

さて以下に示すのが天草版平家巻第二と、それに対応する古典平家巻第四・巻第五に加えて、冒頭章段の「祇王」との対校表である。この対校表をもとにして、天草版平家と古典平家（高野本）の構成をみることにする。

天草版平家 巻第二	古典平家（高野本）		備 考
	登載章段名	不登載章段名	
第一	祇王		巻第一から移行
第二	馳之沙汰 信連 競（前半13行まで）	嚴島御幸 還御 源氏揃	巻第四
第三	競		
第四	山門牒状 南都牒状 永僉議 大衆揃（前半まで）		
第五	大衆揃 橋合戦（前半まで）		
第六	橋合戦		
第七	宮御最期（前半まで） 宮御最期 若宮出家		
第八	鶴	通乗之沙汰	
第九	文学荒行	三井寺炎上 都遷 月見 物怪之沙汰 早馬 朝敵揃 咸陽宮 勸進帳 文学被流	巻第五
第十	福原院宣 富士川（前半まで） 富士川 五節之沙汰 都帰	奈良炎上	

(2) 対校表の観察

(2) - 1 「Guiuō」章段と「高倉宮以仁王」の事件との関係

「祇王」章段の移行について、焦点をしぼることにする。

古典平家では巻第一に位置を占めている「祇王」章段が、天草版平家では巻第二の冒頭に位置を移行している。この Guiuō 章段に続くのが「高倉宮以仁王」の事件、第二章段から第八章段におよぶ大事件である。高倉宮以仁王が源三位頼政にすすめられて企てた、平家打倒の顛末を語ったものである。Guiuō

章段では、「世間の謗をもはばかり、人の嘲りをもかえりみいで fuxiguina coto のみをせられてござる」清盛に対する私憤から出家する祇王、一方「高倉宮以仁王」の事件では、「三位入道とし何たる心がついて謀叛をばをこされたぞと言うに、宗盛 fuxiguina coto をせられたゆえぢゃ」とみられる宗盛に対する私憤から「なましいに vatacuxi にわえくわたてられず、宮をすすめまいらせて」謀叛を企てた頼政が語られる。

「Guiuō」と「高倉宮以仁王」の事件を結ぶ key word は、「fuxiguina coto」をせられたである。

清盛に対する私憤から出家する祇王、宗盛に対する私憤から謀叛を企てた頼政、この清盛・宗盛親子の「fuxiguina coto をせられた」を語るのが巻第二冒頭章段 Guiuō であり、第二章段から第八章段に及ぶ「高倉宮以仁王」の事件である。「fuxiguina coto」をなす清盛・宗盛親子の行為が構成上の効果をあげるには、Guiuō 章段は、古典平家巻第一「祇王」の位置ではなく、大きく移行して巻第二第一章段に位置するのがふさわしい。清盛・宗盛親子の「fuxiguina coto」をなす連鎖表現が効果的である。不干ハビヤンの意図的な配慮によって「Guiuō」章段は巻第二冒頭に置かれたものと思われる。

また「祇王」章段の終尾に注目すると、天草版「Guiuō」章段に対する不干ハビヤンの姿勢が浮びあがってくる。

祇王（巻第一 高野本）

いざもろともにねがはん」とて、四人一所にこもりゐて、あさゆふ仏前に花香をそなへ、余念なくねがひければ、遅速こそありけれ、四人のあまども、皆往生の素懐をとげけるとぞ聞えし。されば後白河の法皇の長講堂の過去帳にも、「祇王・祇女・仏・とぢらが尊霊」と、四人一所に入られけり。あはれなりし事どもなり。

「祇王」章段は、念仏往生をとげた女人往生話の一例として古典平家巻第一に位置を占めている。

巻第二・第一「Guiuō」章段

いざさらばもろともに後生を願わうと言うて、四人一所に籠って、朝夕仏の前に花、香をそなえて、余念もなう後生を願うてついに buji ni vouatta と、(無事に終わった)申す。

『日葡辞書』Vōjō (往生) Yuqi vmaruru 次の世に再び生まれること、また、救済されること、すなわちゼンチョ (異教徒) が思っているように、阿弥陀のパライソ (天国) に行くこと。

Vōjō no soquai (往生の素懐) 救済されること

祇王・仏御前の出家(清盛の意にさからい、清盛の手の下しようがない状態を選びとった)を語る Guiuō 章段の結びは、「bujini vouatta」がふさわしい。古典平家(出家譚・女人往生)とは、乖離が大きい。

(2) - 2 源頼朝の挙兵

源頼朝の挙兵が語られるのは、第九・第十の2章段である。

第九. 文覚のすすめによって頼朝の謀叛ををこさせられたこと、平家わまたこれを平げうとて、討手をくだされたこと。

VM. 頼朝の謀叛ををこさせられた由来をもを語りあれ。

QI. かしこまった. ~年ごろ日ごろもこそあつたに、今年何たる心がついて謀反をばをこされたぞと申すに、高雄の文覚上人の申しすすめられたゆえと、聞えた。

第十. 平家のつわものども鳥の羽音に驚いて、敗軍して面目を失い、京えのほれば、頼朝わ軍に勝つて鎌倉え帰られたこと。

VM. なう喜一、そのさきをもまっとお語りあれ。

QI. されば果たしまらしょう。

として語られる天草版平家第九章段へは、古典平家「文学荒行」・「福原院宣」・「富士川」(前半部分)の3章段が取り入れられ、第十章段へは、古典平家から「富士川」・「五節之沙汰」・「都帰」の3章段が入っている。これら両章段には、源頼朝の挙兵から、富士川における平家軍の敗退、平家の近江の国への発行までが語られる。

なお巻第二十章段の最終末尾が、注目される。

同じく二十三日に近江の源氏を攻めうずるとて、大將軍にわ清盛の三男知盛、副將軍にわ忠度を定めその勢二万余騎で、近江え発向して、所々方々の城を攻め落いて美濃、尾張え越されまらしたれども、tsuini facabacaxij coto ua nacatta (ついにはかばかしい事わなかつた)と、聞こえまらしてござる。この巻第二の最終末尾には、平家衰亡のきざしが語られていることになるう。

ここまでは古典平家(高野本:東京大学国語研究室蔵本)を使用し、比較をおこなってきた。

高野本の内容が2分されるものが多くみられ、語られる内容の連続性に無理があるようである。これからは「国会本」(百二十句本・平仮名本)を使用することにする。

3 天草版平家物語巻第三の構成

巻第一・巻第二の構成を記す際にも示したように、巻第三の構成をみるためにも古典平家(巻第三からは、国会本との比較となる)との対校表を作成し、そこから得られる諸点について検討を加えることにする。

(1) 天草版平家物語巻第三の表題および古典平家(国会本)との対校表

対校表を示す前に、天草版平家物語巻第三(13章段)の表題を記すことにする。

- 第一. 木曾殿の由来と、平家に対して謀叛ををこされ、平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと。
- 第二. 平家木曾をほろぼさうとして、北国え下らるれば、そのうちに木曾と、頼朝不和の事があつたれども、ついに和睦せられたこと: また木曾殿が火打城にをかれた斎明威儀師謀叛を起し、平家の味方してその城をとらせたこと。
- 第三. 木曾も、平家もたがいの方々え人数くばりをしたことと、同じく俱利伽羅が谷で合戦して、平家を残り少なにうちなし、また志保坂の合戦にも木曾うち勝ったこと。
- 第四. 篠原の合戦にも平家負けられたこと: 並びに実盛が討死してその鬚を洗われたこと。
- 第五. 木曾軍の評定をして比叡の山を語らわるれば、すなわち比叡の山も木曾にくみし、平家をそむいたこと: 並びに平家西国の合戦にわ勝利を得られたこと。
- 第六. 木曾諸方から都え入ると聞いて、平家わ主上をも法皇をもとり奉って、西国え落ちようとせらるる時、法皇いづちともなく失せさせられたこと: 同じく平家の都落ちと、また忠度の歌の沙汰。
- 第七. 維盛の落ちらるれば、北の方をはじめ、子たちの維盛を慕われたこと。
- 第八. 平家の一門わ都を落ちらるるそのうちに池の大納言殿わ都にとどまられたこと: 同じく福原を立たるとて、一門の人々名残を惜しまれたこと。
- 第九. 法皇鞍馬の寺から比叡の山え還御あつたことと、平家の西国え落ちられてからのこと。
- 第十. 院宣によって豊後の緒方平家に対し謀叛を起すによって、平家あつかわるれどもかなわず: つい

に太宰の府にもえたまられいで、かちはだしで落ちさまよわれたことと、屋島の内裏づくりのこと、
 第十一、木曾が猫間殿に会うての無簇と、車に乗って牛にひきづられたこと。
 第十二、平家室山、水島二箇所の合戦にうち勝たれたことと、兼康が木曾に対しての謀叛と、源氏の大将行家の合戦のこと。
 第十三、木曾都にをいて狼藉をなすを法皇からして戒めさせられたれば、法皇のござる法住寺殿まで押し寄せて、合戦をし、御所を焼いたこと。
 さて以下に示すのが天草版平家巻第三と、それに対応する古典平家(国会本)巻第六・巻第七・巻第八との対校表である。
 この対校表をもとにして、天草版平家と古典平家の構成をみることにする。

天草版平家 巻第三	古典平家(国会本)		備考
	登載章段名	不登載章段名	
第一	第54句 義仲謀叛	第51句 高倉の院崩御 第52句 紅葉の巻 第53句 葵の女御 第55句 入道死去 第56句 祇園の女御 第57句 邦綱死去 第58句 須俣川 第59句 城の太郎頼死	巻第六
第二	第60句 城の四郎官途		巻第七
第三	第61句 平家北国下向		
第四	第62句 火打合戦		
第五	第63句 木曾の願書		
第六	第64句 実盛		
第七	第65句 玄昉の沙汰		
第八	第66句 義仲山門牒状		
第九	第67句 平家の一門願書		巻第八
第十	第68句 法皇鞍馬落ち		
第十一	第69句 維盛都落ち		
第十二	第70句 平家一門都落ち		
第十三	第71句 四の宮即位		
	第72句 宇佐詣で		
	第73句 緒環		
	第74句 柳が浦落ち	第75句 頼朝院宣申	
	第76句 木曾猫間の対面		
	第77句 水島合戦		
	第78句 瀬尾最後		
	第79句 法住寺合戦		
	第80句 義経熱田の陣		

(2) 対校表の観察

(2) - 1 構成の妙：第一章段・第十三章段

天草版平家巻第三の構成は、編纂者不干ハビヤンの技が冴える章段である。冒頭章段および終尾章段における大胆さ・緻密さに裏付けられた構成は、巻第三の主題を明確に打ち出し、巻第三を象徴するも

のである。

第一章段：木曾殿の由来と、平家に対して謀叛ををこされ、平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたときには、「国会本」からは第54句義仲謀叛・第60句城の四郎官途の2句がとりこまれている。小題目からみると第54句義仲謀叛では、城の太郎受領・石川城落去が排除されているが、第60句城の四郎官途では、すべての小題目がとりこまれている。排除された城の太郎受領・石川城落去は、直接木曾義仲と拘わりを持つものではない。また高野本からみると、「廻文・飛脚到来・横田河原合戦」の3章段のみがとりこまれている。

さて巻第三第一章段の、聞き手兼進行役をつとめる右馬の允(VM.)と、話し手の喜一検校(QI.)の語りはじめ、その後の展開を記す。

VM. ゆうべの物語が余り本意ないほどに、いままた木曾殿の成り立ち、その謀叛のやうをもを語りあれ。

QI. さてさて果てしもないことを仰せらるる：さらば語りましょう。

QI. まづその木曾殿わそのころ信濃の国にをぢやってござる。その父義賢わ武蔵の国で悪源太に討たれたが、その時木曾殿わ二歳であったを

と、木曾の由来を表題にそって語りはじめるのは、国会本：第54句義仲謀叛、高野本：廻文に相当する箇所である。

QI. は続けて、木曾とゆうところわ信濃にとっても南の端で、美濃の国の境ぢやによって、都えもむげに近かったほどにと、平家に対して謀叛ををこされ、相当内容が続く。高野本：飛脚到来にあたる。(以上が第54句の内容)

QI. はさらに続けてそのうちに越後の国の長茂とゆう者わ平家の味方をして、人数を率して、都合その勢四万あまりで木曾を追代しようと言うて、信濃の国え発向して

と、表題最後の平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたことは、国会本：第60句城の四郎官途、高野本：横田河原合戦に相当する。

したがって国会本：第54句義仲謀叛+第60句城の四郎官途をもって、天草版平家巻第三第一章段が語られることになる。(高野本：廻文+飛脚到来+横田河原合戦 3章段の内容に相当する。)

天草版平家巻第三第一章段は次のように終っている。

(横田河原合戦の敗戦を)都えつげたれども、平家の大将宗盛わこれをことともせいで、種々様々の位あつかいばかりをしていられましたわ、nambô nurui coto deua vorinaica? (なんぼうぬるいことどわをりないか?) 東国、北国にわ源氏どもが蜂のごとくに起って、ただ今都え攻め上らうとするとところに、波のたつやら、風の吹くやらも知らいで、このやうにせらるることわ、まことに言うかいな事どもでござる。

都の平家の油断、緊張感の欠けた様子と、義仲を初めとする全国の反平家動向との落差を、nambô nurui coto deua vorinaica? と口語性の濃い表現で的確に表現するハビヤンの独自の描写力が注目される。

総じて言えば第一章段前半には、義仲の旗挙げ・諸国の反平家動勢の報(54句)、後半(60句)には義仲の横田河原合戦の勝利・平家の油断(nurui 空気)が語られている。続く第二章段以降の義仲に先がけて、この第一章段の義仲の登場は、巻第三を象徴するものと言えよう。

巻第三第一章段に続き、ハビヤンの構成力(改編の妙)がみられる第十三章段(終尾)をみることにする。

第十三章段：木曾都にをいて狼藉をなすを法皇からして戒めさせられたれば、法皇のござる法住寺殿

まで押し寄せて、合戦をし、御所を焼いたことには、国会本からは第79句法住寺合戦・第80句義経熱田の陣の2章段がとりこまれている。小題目からみると第79句法住寺合戦では、明雲僧正討死・仲兼馬かへ・信濃の次郎討死・刑部卿三位剥がれ・脩範にはか出家が、直接拘わりを持つものではないとして排除されている。注目されるのは第80句義経熱田の陣である。国会本第80句義経熱田の陣は、義仲悪行・公朝・時成熱田下向・同じく鎌倉へ参着・鼓判官鎌倉参上・義仲平家和議ならず・義仲大救行はる事 の6小題目からなり、これをもって国会本は巻第八が終る。一方天草版平家では、第十三章段に国会本第80句義経熱田の陣からもちこんだのは「義仲悪行」のみである。後の5小題目は巻第四第一章段：頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範頼と、義経をのほいてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味しようとなつたつかいをたてたれども、平家同心せられなんだことへ移行している。法住寺合戦の後日譚相当部分をすべて巻第四第一章段へ移行させ、巻第三の最終章段には「義経悪行」のみをとりこむという構成の組替えは、不干ハビヤンの編纂姿勢が窺われるところである。『天草版平家物語』の筋立ての単純化・内容把握の容易さには、外来宣教師のための日本語テキストとしての配慮があらわれている。

天草版平家巻第三第十三章段の最後は、下記のように結ばれている。

まことに木曾が主上、法皇の分けをも知らいで、むさとした事を言うたことわをかしいことぢゃ、君子わ器物ならずとこそ言うに、ひとえに弓矢のことばかりに携わったことわあさましい儀ぢゃ、まことに木曾が悪行わ平家の驕った時のしわざにはるかましたと世上の取り沙汰でござった。

前半の武人としての成果をあげ肯定的な側面ではなく、義仲の否定的な側面をみせている。「義仲悪行」にみられる義仲は、遂に御所までも焼いてしまう。

(2) - 2 不登載章段の内容

まったく古典平家から天草版平家へと持ちこまれた不登載章段は、第一章段に8句みられる。第一章段は残り2句：第54句義仲謀叛+第60句城の四郎官途のみで成り立っている。編者不干ハビヤンの大胆な構成力をみることができ、第一章段8句以外の不登載章段は、第十章段第75句頼朝院宣申のみである。

第一章段に見られる不登載章段について、簡潔に記しておくことにする。

- 高倉院追悼説話群：国会本第51句高倉の院崩御にはじまる巻第六冒頭から、高倉院に拘わる第52句紅葉の巻・第53句葵の女御（含小督）のすべて
- 清盛追悼説話群：第55句入道死去（含築島）・第56句祇園女御（含慈心坊）・第57句邦綱死去のすべて
- 第58句須俣川：須俣合戦（治承5年3月10日、知盛・清経・有盛が、尾張須俣に源行家と戦い勝つ）は、清盛亡き後、初めて源平が対峙し、平家が勝利をおさめた合戦。第60句において横田河原合戦（城の四郎長茂を木曾が光盛の武略により敗る）を省略せず、とりこまれているのとは対照的である。この横田河原合戦に勝利をおさめた義仲は、北国の雄となる。
- 第59句城の太郎頼死：城の太郎資長の怪死説など

上記の高倉院追悼説話群・清盛追悼説話群・須俣合戦および城の太郎資長の怪死説等は、古典平家の大河のうねりを支えるものである。しかし天草版平家は、義仲に注目を集める工夫として第54句義仲謀叛+第60句城の四郎官途のみをもって一章段を成している。ハビヤンの筋立ての単純化による大胆な改編が注目される。

4 天草版平家物語卷第四の構成

卷第一・卷第二・卷第三の構成を記す際にも示したように、卷第四の構成をみるためにも古典平家(国会本)との対校表を作成し、そこから得られる諸点について検討を加えることにする。

(1) 天草版平家物語卷第四の表題および古典平家との対校表

対校表を示す前に、天草版平家物語卷第四(28章段)の表題を記すことにする。

- 第一. 頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範頼と、義経をのぼいてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味しょうとつかいをたてたれども、平家同心せられなんだこと。
- 第二. 範頼、義経木曾が討手に上らるること：同じく梶原にわ摺墨、佐々木にわ生食とゆう馬を下されたこと：並びにかれら宇治川の先陣を争うたこと。
- 第三. 義経兵どもに敵をば防がせて、その身わ院の御所え参って、御所を守護せられたこと。
- 第四. 木曾兼平に行きやうて、三百騎になって、また合戦をし、ついに木曾も、兼平も討死せられたこと。
- 第五. 樋口の次郎、降参して後に切らるること：同じく茅野が討死のこと。
- 第六. 源平大手、搦手の大将を分けられて、義経わ三草の合戦にうち勝って、また鶴越えかかられたこと。
- 第七. 熊谷と、平山と一の谷え押し寄せ、軍して一二のかけを争うたこと。
- 第八. 大手生田の森の合戦のこと：同じく鶴越を落され、越中の前司が討死のこと。
- 第九. 平家の一門の人々多う討たれたその中に、敦盛熊谷に会うて討死のこと。
- 第十. 通盛の北の方、小宰相の局通盛に後れ、身を投げられたこと。
- 第十. 都で平家の一門の首を渡いたことと、三位の中将夫婦の沙汰。
- 第十一. 重衡都を渡されて後、三種の神器を屋島え所望せられたこと：同じくその北の方のこと。
- 第十二. 重衡のあづま下りのこと、同じく千手のまえが沙汰。
- 第十三. 小松の三位の中将屋島を出て高野え上らるること：同じく滝口、横笛がこと。
- 第十四. 三位の中将の受戒、重景石童丸がこと、同じく三位の中将身を投げられたこと。
- 第十五. 池の大納言関東え下られたこと：また三位の中将の北の方のこと。
- 第十六. 義経と梶原逆櫓の論：同じく屋島え渡って内裏を焼き払い、軍せらるるに、嗣信義経の身代りに立って死んだこと。
- 第十七. 那須の与一が扇を射たこと：また義経弓を取り返されたこと。
- 第十八. 義経教能をたばかって生け捕ったこと、義経と梶原と戦いに及ばるること：同じく平家の一門ことごとく亡びられたこと。
- 第十九. 平家の生け捕り都え入って渡さるること：同じく建礼門院のこと。
- 第二十. 大臣殿を子副将に対面あること：同じく副将を害すること。
- 第二十一. 大臣殿の東下り、同じく帰洛の道でくびをはねられ、京中を渡されたこと。
- 第二十二. 地震のこと、また建礼門院吉田の御坊に住みわびさせられたこと。
- 第二十三. 平大納言の配所にをもむかるること：並びに建礼門院の大原え御隠居のこと。
- 第二十四. 昌尊が夜討ちのこと、また頼朝と、範頼不快のこと。

第二十五. 義経の都を落ちられたこと：並びに北条の上洛のこと.

第二十六. 六代を北条召しとしてのち、文覚わびことによって頼朝赦免せられたこと.

第二十七. 法皇大原に御幸なされ、女院に御見参あったこと.

第二十八. 六代高野え上らるる事と、平家断絶、また文覚も流され、ついにわ六代も首をはねられたこと.

さて以下に示すのが天草版平家卷第四と、それに対応する古典平家（国会本）卷第九～卷第十二に加えて、冒頭章段第80句義経熱田の陣との対校表である。

この対校表をもとにして、天草版平家と古典平家との構成をみることにする。

天草版平家 卷第四	古典平家（国会本）		備 考
	登載章段名	不登載章段名	
第一	第 80 句 義経熱田の陣		卷第八 卷第九
第二	第 81 句 宇治川		
第三	第 82 句 義経院参		
第四	第 83 句 兼平		
第五	兼平		
第六	第 84 句 六箇度のいくさ		
	第 85 句 三草山		
第七	第 86 句 熊谷・平山一二の駆		
第八	第 87 句 梶原二度の駆		
第九	第 88 句 鴨越		
第十	第 89 句 一の谷		卷第十
	第 90 句 小宰相身投ぐる事		
第十	第 91 句 平家の一門首渡さるる事		
第十一	第 92 句 屋島院宣		
	第 93 句 重衡受戒		
第十二	第 94 句 重衡東下り		
第十三	第 95 句 横笛		
	第 96 句 高野の巻		
第十四	第 97 句 維盛出家		
	第 98 句 維盛入水		
第十五	第 99 句 池の大納言関東下り		卷第十一
	第 100 句 藤戸		
第十六	第 101 句 屋島		
第十七	第 102 句 扇の的		
第十八	第 103 句 讒言梶原		
	第 104 句 壇の浦		
	第 105 句 早鞆		
第十九	第 106 句 平家一門大路渡し	第 107 句 劍の巻上 第 108 句 劍の巻下	
第二十	第 109 句 鏡の沙汰		
	第 110 句 副将		
第二十一	第 111 句 大臣殿最後		
	第 112 句 重衡の最後		
第二十二	第 113 句 大地震		
第二十三	第 114 句 腰越		
	第 115 句 時忠能登下り		
第二十四	第 116 句 堀川夜討		

第二十五	第 117 句	義経都落ち		
第二十六	第 118 句	六代		
第二十七	第 119 句	大原御幸		
第二十八	第 120 句	断絶平家		

(2) 対校表の観察

(2) - 1 天草版平家巻第四の内容

天草版平家巻第四(全 28 章段、実質 29 章段)と、古典平家(国会本:巻第九~巻第十二・巻第八 80 句を含む)との対校表からは、容易に巻第四の主題を示すことができる。

巻第四は、質・量ともに他の巻とは異なり、古典平家から持ちこんでいる内容が多くみられる。語られる内容によって大きく 2 区分されていると言える。

第 1 区分(冒頭~第九章段)は、主として木曾義仲の動向(第一章段~第五章段)を語る部分。国会本 4 章段を含む。および源義経の動向(第六章段~第九章段)を語る部分。国会本 6 章段を含む。義経の動向はさらに、第十六章段~第十八章段:国会本 5 章段を含む。また二十四章段・第二十五章段(国会本 2 章段)におよぶ。したがって第 1 区分は、木曾義仲・源義経の敗北への過程を語ることになる。

第 2 区分は(第十一章段~第二十八章段:ただし上記義経の動向を語る五章段分を除く)、平家の人々の動向を語る部分であり、国会本 20 章段分を含む。その内容は、次の通りである。

重衡の動向:第十一章段・第十二章段(国会本 3 章段)

維盛の動向:第十三章段~第十五章段(国会本 6 章段)

宗盛の動向:第二十章段・第二十一章段(国会本 4 章段)

建礼門院の動向:第十九章段・第二十二章段・第二十三章段および第二十七章段(国会本 5 章段)

六代の動向は第二十六章段および第二十八章段(国会本 2 章段) したがって第 2 区分は、平家断絶への過程を語ることになる。

また 2 区分に準ずるが第十章段(通盛の北の方、小宰相の局通盛に後れ、身を投げられたこと)および第十章段(正確には第十一章段とある所。誤り。)都で平家の一門の首を渡いたことと、三位の中將夫婦の沙汰)の 2 章段、通盛の北の方・維盛の北の方の詳述も注目される。

天草版平家巻第四は、国会本巻第八(第 80 句)から巻第十二(第 120 句)までを集約したものといえる。

○木曾義仲・源義経敗北への過程(第 1 区分)

○平家断絶への過程:重衡・維盛・宗盛・建礼門院・六代の動向(第 2 区分)

○構成の妙

天草版平家巻第四が国会本第 81 句宇治川(巻第九)から起されるのではなく、第 80 句義経熱田の陣(巻第八)から始まるのが、まず注目される。

国会本第 80 句義経熱田の陣は、義仲悪行・公朝・時成熱田下向・同じく鎌倉へ参着・鼓判官鎌倉参上・義仲平家和睦ならず・義仲大赦行はるる事の 6 小題目から成り、これをもって国会本は巻第八が終る。この 6 小題目の冒頭、義仲悪行のみをとりこみ、第 79 句法住寺合戦とともに一章段をなしたのが、天草版平家巻第三第十三章段(木曾都にをいて狼藉をなすを法皇からして戒めさせられたれば、法皇のござる法住寺殿まで押し寄せて、合戦をし、御所を焼いたこと)である。法住寺合戦の後日譚相当部分にあたる後の 5 小題目は巻第四第一章段(頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範頼と、義経をのぼいてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味しようとかいゝをたてたれども、平家同心せられなんだこと)へ移行している。国会本第 80 句を分割し、構成の組替えを行なう編纂者不干ハビヤンの大胆さ緻密さが注目される。

また国会本第83句兼平が、天草版平家では第四章段（木曾兼平に行きやうて、三百騎になって、また合戦をし、ついに木曾も、兼平も討死せられたこと）と第五章段（樋口の次郎、降参して後に切らるること：同じく茅野が討死のこと）に、2章段仕立てになっていることも注目される。第83句兼平は12小題目から成るが、2章段仕立ては日本語学習者には理解されやすい。随所に配慮がみられる。

○第120句 断絶平家

これまでみてきた不干ハビヤンの大胆な構成力がみられないのが、第120句断絶平家の章段である。断絶平家は9小題目より成るが、すべて登載小題目である。改編もなく、省筆もなく、国会本（百二十句本）の内容を丸ごと、天草版平家は受け入れている。

巻第四第二十八（六代高野え上らるる事と、平家断絶、また文覚も流され、ついにわ六代も首をはねられたこと）は、次のように語りはじめられる。

VM. して大略平家もあそここなれども、大方聞き通いたかと存ずる。

QI. さればされば聞きも聞かせられ、語りも語りまらした事ぢや：とてもものに平家断絶のところも語りはたしまらしょうず、として、第120句断絶平家が登載小題目 六代出家・平家の方人誅せらるる事・伊賀大夫誅戮・丹後侍従誅戮・土佐守宗実干死・越中次郎兵衛誅戮・文学謀叛・頼朝死去 文覚流罪・六代誅戮の順にしたがって語られる。

さいごの小題目 六代誅戮 終尾は、国会本・天草版双方の叙述を示す。

○六代誅戮

六代御前は、三位禪師とて行ひすましておはせしを、文覚流されてのち、「さる人の弟子、さる人の子なり、孫なり、髪は剃りたりとも、心はよも剃らじ」とて、宮人資兼に仰せて、鎌倉へ召し下さる。このたびは、駿河の国の住人、岡部の三郎大夫、うけたまはつて、鎌倉の六浦坂にて斬られけり。十二歳より三十二まで保ちけるは、長谷の観音の御利生とこそおほえたれ。

それよりしてぞ、平家の子孫は絶えにけり。

○第二十八 六代高野え上らるる事と、平家断絶、また文覚も流され、ついにわ六代も首をはねられたこと。

六代御前（Rocudaigoje）わ三位の禪師とてをこないすまいてござったを、文覚流されてのち、さる人の弟子なり、さる人の子なり、孫なり、髪わそったりとも心わよもそらじとあつて、鎌倉え召しくださいされ、ついに失われたと申す。

天草版には、国会本の2文が欠けている。

○十二歳より三十二まで保ちけるは、長谷の観音の御利生とこそおほえたれ。

○それよりしてこそ、平家の子孫は絶えにけり。

『天草版平家物語』と、古典平家（国会本）『平家物語』との乖離を示すところである。

(2) - 2 不登載章段の内容

天草版平家巻第四の不登載章段は、第107句 劍の巻上、第108句 劍の巻下の2章段であるが、第109句 鏡の沙汰を準ずるものとして加えたい。「鏡の沙汰」からは章段末尾の小題目：頼朝義経不快のみが、第二十章段に第110句副将とともにとりこまれている。不登載小題目は次のものである。天の岩戸の事・紀伊の国日前像の起り・内侍所炎上のがれ給ふ事・神楽弓立の宮人・二見の浦の鏡・神璽の沙汰の6小題目である。

天草版平家に持ちこまれなかった第107句・第108句および第109句の冒頭を記しておく。

○第107句剣の巻上

神代よりつたはれる二つの霊剣あり。「十握の剣」「叢雲の剣」これなり。十握の剣は、素戔鳴尊大蛇を切り給ひてのち、「天の蠅切の剣」と名づけらる。大和の国石の上布留の社にこめられたり。叢雲の剣は、のちに「草薙の剣」と号す。内裏にありて御守りたりしに、この度長く沈みて見えず。

○第108句剣の巻下

源家に二つの剣あり。「膝丸」「鬚切」と申しけり。人皇五十六代の帝、清和天皇第六の皇子、貞純の親王と申したてまつる。その御子経基六孫王。その嫡子多田の満仲、上野介たりしとき、源の姓を賜はつて、「天下の守護たるべき」よし、勅諭ありければ、まづよき剣をぞもとめられける。

○第109句鏡の沙汰

神代より三つの鏡あり。「内侍所」と申したてまつるはその一つなり。昔天照大神、天の岩戸を閉ぢて、天下暗闇とならせましませしとき、よろづの神たち集つて、「こは、いかがすべき」とて、はかりごとを思ひまうけ、榊の御四手をささげ、御神楽を奏し給ひしかば、天照大神、岩戸を細めに開かせ給ひて、御覧ぜられしとき、

これらの冒頭記述から明らかなように、天草版平家第四から排除されているのは、皇位の象徴とされる八咫鏡（内侍所）・八尺瓊曲玉（神璽）・草薙剣（宝剣）の三種の神器について語るときである。

ところが巻第四において、内侍所・宝剣・神璽がみられる。これらの語句が出現する箇所をあげてみる。

○第十一（重衡都を渡されて後、三種の神器を屋島え所望せられたこと：同じくその北の方のこと＝第92句屋島院宣－院宣）

- 大臣殿時忠卿え勅定の趣を条々申しくだされ、母の二位殿にも細かにを文をもってま一度御覧ぜられうと申し召されば、内侍所のを事よくよく仰せられいと、書かれた。
- （二位殿）何のやうかあらう？はや内侍所かえし入れ奉って、重衡たすけてを見せあれ：
- （人々）帝王のを位をもたせらると申すわ、ひとえに内侍所の故ぢゃ：

○第十八（義盛教能をたばかって生け捕ったこと、義経と梶原と戦いに及ばること：同じく平家の一門ことごとく亡びられたこと＝第105句早鞆一先帝・二位殿御最後）

- 二位殿まづ先帝を抱き奉りを身に二所までくりつけ、宝剣を腰にさいて、神璽を脇ばさみ、練袴のそばを高うさしはさみ、

○第十九（平家の生け捕り都え入って渡さること：同じく建礼門院のこと＝第100句平家一門大路渡し－西国より早馬）

- 去んぬる三月二十四日の卯の刻に壇の浦赤間が関のあたりで平家をついに攻め落し、内侍所、神璽をも参らす：

このように平家物語を語るに必要な「内侍所・宝剣・神璽」は、排除されることがない。

おわりに（まとめとして）

登載章段を中心に、各巻の中核となる諸点をまとめることにする。

1. 巻第一の天草版平家には、古典平家（読み本系・語り本系ともに）総序とも言うべき「祇園精舎」冒頭「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。婆羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす」が排除されている。異教である仏教的な視点からではなく「をごりをきわめ、人をも人と思わぬよう

なるもの」としての清盛の「行儀の不法なことをのせたもの」として、『天草版平家物語』を語ろうとしている。

- 古典平家の各章段と1対1の関係を持っているわけではない。たとえば、巻第一の冒頭：平家の先祖の系図（祇園精舎・殿上閣討）、また忠盛の上のほまれ（殿上閣討・鱸）と、清盛の威勢栄華（禿髪・吾身栄花）のことには、古典平家から5章段分をとりこんでいる。
- とりあげる大事件は、「鹿谷」事件である。藤原成親等による平家打倒の策が失敗し、その顛末・後日譚までが第三章段～第十二章段までの10章段で語られる。古典平家では巻第一「鹿谷」から巻第三「僧都死去」に及ぶ。

2. 巻第二ではハビヤンの意図的な配置によって、古典平家巻第一に位置する「祇王」が、天草版平家巻第二冒頭に置かれることが注目される。それに続くのが第二章段～第八章段で語られる「高倉宮以仁王」の事件である。高倉宮以仁王が、源三位頼政にすすめられて企てた平家打倒の顛末を語るものである。

「fuxiguina cotoのみをせられてござる」清盛に対する私憤から出家する祇王・宗盛に対する私憤から高倉宮以仁王に対して「なましひに私には企られず、宮をすすめ参らせ」て謀叛を企てた頼政、この親子（清盛・宗盛）の「fuxiguina coto」を語るのが、祇王・高倉宮以仁王の事件である。「fuxiguina coto」をなす清盛・宗盛親子の行為が構成上の効果をあげるには、“Guiuō”章段は、古典平家巻第一「祇王」の位置ではなく、大きく移行して巻第二第一章段に位置するのがふさわしい。清盛・宗盛親子の「fuxiguina coto」をなす連鎖表現が効果的である。

3. 巻第三で注目されるのは第一章段である。「木曾殿の由来と、平家に対して謀叛ををこされ、平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと」には、国会本第54句義仲謀叛＋第60句城の四郎官途の2章段がとりこまれている。この2章段だけで成り立つ天草版第一章段は、不干ハビヤンの大胆にして緻密な構成力によるものである。木曾義仲に焦点を絞る筋立ての簡明さに、取捨選択の妙がある。巻第三の主題を明確に打ち出し、巻第三を象徴するものと言える。

次に注目されるのは第十三章段である。

「木曾都にをいて狼藉をなすを法皇からして戒めさせられたれば、法皇のござる法住寺殿まで押し寄せて、合戦をし、御所を焼いたこと」には、国会本第79句法住寺合戦＋第80句義経熱田の陣2章段がとりこまれている。第80句熱田の陣から第十三章段にもちこんだのは小題目「義仲悪行」のみであり、法住寺合戦の後日譚相当部分にあたる後の小題目は巻第四第一章段へ移行している。このような構成の組替えは、ハビヤンの外来宣教師のための日本語テキストとしてのとりくみにある。筋立ての単純化・内容把握の容易さに特色がみられる。

4. 巻第四は、質量ともに他の巻とは異なり、古典平家（国会本）から持ちこんでいる内容が多い。国会本巻第八（第80句）から巻第十二（第120句）までを集約したものと言える。

語られるのは、下記のものである。

（木曾義仲・源義経敗北への過程
平家断絶への過程：重衡・維盛・宗盛・建礼門院・六代の動向

- 構成上の注目すべき工夫は、巻第四第一章段にある。

国会本第81句宇治川から天草版平家巻第四が起されるのではなく、第80句義経熱田の陣から始まる。この第80句は、冒頭小題目義仲悪行のみを巻第三第十三章段へ持ちこみ、法住寺合戦の後日譚相当部分にあたる後の5小題目は、巻第四第一章段（頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範義と、義経をのぼいてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味をしよ

うとつかいをたてたれども、平家同心せられなんだこと)へ移行させている。国会本第80句を分割し、構成の組替えを行なう編纂者不干ハビヤンの大胆さ・緻密さに裏付けされるものである。(上記3第十三章段の要約と重なる。)

- 第120句断絶平家の末文、十二歳より三十二まで保ちけるは、長谷の観音の御利生とこそおぼえたれ。それよりしてこそ、平家の子孫は絶えけり。を欠文とする以外は、天草版平家は古典平家の内容をそのまま丸ごと取りいれている。ハビヤンの積極的な工夫が介入していない。

参考図書

麻原美子・春田宣・松尾葦江編(1990)『屋代本高野本対照平家物語』新典社

斯道文庫編(1970)『百二十句本平家物語』汲古書院

水原一校注(1979)『平家物語 上・中・下』新潮日本古典集成 新潮社

梶原正昭・山下宏明校注(1991・93)『平家物語上・下』新日本古典文学大系 岩波書店

富倉徳次郎校注(1949)『平家物語上・中・下』日本古典全書 朝日新聞社

江口正弘(1986)『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院